

京都府農林水産ビジョン（仮称）検討委員会（第5回）議事要旨

1 日 時

令和元年5月15日（水）13：00～15：30

2 場 所

ホテルルビノ京都堀川 2階 「加茂の間」

3 概 要

●開会あいさつ

第5回を迎える本検討会、今回のテーマはスマート農林水産業と輸出対策、まとめに入るための構成について議論をお願いしたい。スマート農林水産業は、国が推進しているところであり、北海道などではドローンなどが既に導入されているが、近畿地方では京都府を含めてかなり遅れており、問題意識を持っている。今年度は京都府では実証や実装の推進、相談窓口の設置を行い、大規模な展示会を開催する。

スマート農林水産業は大規模経営向けと思われがちだが、中山間地域こそ技術を導入すべきであり、5年、10年すれば農村の状況も大きく変わるのではないかと考えている。京都府として、こういった新たな取組を始めなければならないと考えている。

輸出については、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたこともあり、世界中でブームになっている。国が懸命に取り組んでいるが、輸出の多くが加工品で一次産品の輸出金額が少ないことに問題意識を持っており、京都府として一次産品の輸出に取り組んでいかなければならないと考えている。

農林水産ビジョンの構成については、コアコンセプト、重点戦略をどうするか御意見をいただきたい。

●スマート農林水産業について

中山間地域で一番困っているのは法面の草刈で、既に平地用の草刈ロボットはあるが、中山間地域の急な法面には対応しておらず、これを導入しても仕方がないと思う。だからこそ、京都府の約65%を占める中山間地域に適した研究開発をすべき。中山間地域で多く生産されているお米は、既にその生産工程のかなりの部分がオートメーション化されており、作業に必要な人数は少なくなっているため、草刈りのようなアシストがあると規模拡大につながると思う。

また、無農薬米にも取り組んでほしい。現状の生産方法では、除草剤を使用せずに生産することは困難。除草機などのスマート技術と合わせて、付加価値化を見据えた上で、スマート技術の導入計画づくりを行うことで選ぶべき技術も見えてくると思う。

もう一つの問題は、鳥獣害。防護柵の設置は進み、実感として被害は減っているように感じるが、その柵がどこかで破られていたら、意味がなくなるので、柵のほつれや穴がないか見回りをしなければならない。中山間地域では重労働なので、野生鳥獣の見回りもロ

ボットや装置でできればと思う。

さらに、京都府でスマート技術の導入が進んでいないと言っていたが、隣の滋賀県では大規模水田の水管理や草刈りにスマート技術が導入されているので見に行ってみてはどうか。

全国的な研究や開発はメーカーを中心に、今後どんどん進むと思うので、そこは任せればいいと思うが、それをどう京都府の特性に応じてカスタマイズするかということが課題。資料（資料1 (P11)）のとおり、把握している限りでは、自走草刈り機も京都府には入っておらず、現状や課題も正確には分かっていない。水田内の除草も合鴨をまねたロボットが水田の中を巡回するようなものも開発されていると聞いている。まずは、そういったものを取り入れ、京都府にどのような課題があるのかを把握しなければならない。

また、宇治茶、万願寺とうがらし、水菜等、京都府独自の品目については、研究開発も進めていかなければならない。

長期的に捉え、付加価値を付けることを考える方々へのカスタマイズであったり、実装の研究をしてもらえると良いと思う。また、相談だけでなく、実践するために並走し、サポートする組織が必要ではないか。

京都らしさをAIなどに盛り込んでいければ良いと思う。AIが少し肥料を少なくコントロールするとか、少ない日照時間でおいしい黒豆を育てるなど、大規模・集約化に負けない中山間地域のAIではないかと思う。カスタマイズと実装・並走は非常に重要である。

亀岡市で中山間地域の水稲栽培についてスマート農業の実証しているところだが、農家や業者と一緒にデータも収集しながらやっていくことを考えている。

また、スマート農業推進プロジェクトチームを京都府庁内に設置し、全国的に有名な方々を招へいした検討会の開催や情報の収集と伴走支援をしっかりとしていきたい。

スマートの技術は2種類あると考えており、1つは、若者がバリバリと収益を上げていくようなもの。もう1つは中山間地域向けに、持続性のある農業のためのものだと考えている。先ほどからいただいている御意見を踏まえて検討したい。

現場と一緒に取り組むことは非常に重要。科学技術の開発においても現場と一緒にデザインし、問題自体を共有することで現場実装が進んでいくということが最前線の考え方。また、農業を中心に記載されているが、水産業などの他の農林水産業については、農業を先にやって成果を見極めて後から他のものをやるという考え方か。同時並行か。

農業だけを先行させるのではなく、林業・水産業も同時に進めたい。水産業については、海の中の状況を陸で分かるようなシステムを考えている。アシストスーツなどは共通して

使えるもの。市町村や漁協などとも連携して進めたい。

京都大学でも稚貝の数を数える、泳いでいる魚の大きさを測るなど新しい技術の開発に携わっている。

スマート化の方向性としては賛成。しかし、機械化が大規模経営に有利なのは基本的な考え方。開発した技術の選択と実装のタイミングが重要になるが、国の大きな方向としては食品安全保障のために優良な農地を残していくという考え方。中山間地域のスマート農業を考えていく上で、国と連携することも大切。また、中山間地域へのカスタマイズについて研究をされるということだが、現時点ではどうか。

ごく一部、除草ロボットなどは中山間地域向けのものもあり、自動運転トラクターも小型化に向かっているので、企業もある程度、中山間地域を向いているようだが、実装までには至っていない。今後はメーカーに京都府に入ってもらって研究と実装を一緒に進めていきたいと考えている。

良いものはコストの面から考えても滋賀県など近隣の府県とも連携していくべき。

並走する組織について、企業やNPOなどをチームに入れるなど、Win-Winでつながれるような連携チームを作ると導入が早くなるのではないか。ベンチャー企業やNPOなどに門戸を開き呼びかけるべき。

●農林水産物の輸出対策について

輸出における加工品の割合が高いことの原因は流通だと思う。生鮮品の流通がどこまで現実的か。

生鮮食品は鮮度保持とコストの問題があることからアジアを中心に輸出している。

畜産で輸出認定を取得している食肉市場は少なく、京都市中央卸売第二市場で牛肉の認定を取得したことは良い足掛かりになるはず。今後、流通をどうするか、流通と同時に品質をどこまで上げていくかが問題になっていくのではないか。現状、輸出が進んでいる近江牛と神戸ビーフは真っ向から対立しているわけではなく、それぞれが得意としている地域とパートナーを組んで販路を拡大している。近江牛はシンガポールを中心としたアジア、神戸ビーフはEUやアメリカ。京都府はそれらと対立を避けて輸出していくべき。

一目でわかる京都府産のパッケージの作成（資料2 (P14)）は、非常に重要。日本でクールであっても外国では必ずしもクールではなく、外国では「ビオ(BiO)」が最も評価され

る。パッケージを見て一目でビオであることが分かる統一的なデザインを考えたほうが良い。

肉にしても野菜にしても京都府の供給量は世界のマーケットの大きさからすれば微々たるものなので、ターゲットを絞って尖ったものにすべき。その方が訴求力もある。戦略を作り込むのに時間はかかると思うが、ニーズの把握、ターゲットの設定がしっかりできているかどうか非常に大切である。

これまでから JA と行っている戦略が「文化（和食）と一緒に売る」ということだったはず。京都府は和食の中心であり、全国の他産地（鹿児島のカツオ節など）と連携して、日本の食文化として広めていくべきではないか。

売っていくためには、認定書を作ればいいのではないかと思う。わざわざ海外に行く必要はなく、日本の包丁さばきや出汁のとり方を学びたいのであれば、海外に教えに行くのではなく、日本に来てもらうという考え方で良いと思う。認定書も英語ではなく、日本語のみで記載する徹底ぶりを見せるべき。フレンチのシェフであっても、日本の包丁さばきや出汁のとり方の認定証があれば自分のレストランに飾ると思う。料理人は探求心旺盛なので、料理人のステータスを上げるという切り口で取り組むのも1つではないか。

認定は大切。京都府は古くから和食の中心の地で、目利きもいる。目利きも資源という考え方で、その目利きを選んだ国内の素材、また、その目利きが育ててきた京野菜という考え方もあると思う。

大学でいえば京都府立大学に和食文化学科ができ、立命館大学に食マネジメント学部ができ、龍谷大学に40年ぶりの農学部ができるなど食に関わる学科ができた。和食のユネスコ無形文化遺産に力を注ぎ、表彰制度をつくり、マーケットでいうと商工が担っている。本来は農林水産ビジョンを作る中でも府庁内の連携を図るべき。委員の方々から御意見をいただいたその思いを十分に伝えて、京都府全体として十分施策に組み上げられていくことが必要ではないかと思う。

問題意識が3つある。1つ目は、スマート社会と言われているものが実は全く進んでいない。キャッシュレス化はスマートの代表格で、中国の杭州市では、ネットスーパーで新鮮だと思えるものを選択し、加工する店に届けてもらい、調味料や味付けを指定し、家庭の味付けで家庭に配達される社会。スマート技術は非常に幅広い。生産履歴を送信することもできるし、作り方のノウハウをカスタマイズしなくてもソフトウェア上で簡単にできる。生鮮品の輸出だけを考えるのではなく、輸出先の味付けに加工したものを輸出するのも1つではないか。海外にはそれに正当な対価を払う人がたくさんいる。

2つ目は、スマートは何を目的に行うのか。今の農業にも魅力を感じながら参入いただけていない方々がチャレンジできる社会になっているのか。60歳で退職して30年間農業ができる社会になっているのかという観点で農業の魅力を作り、やりたい人が参入できる社会をどう作っていくのか。スマート技術は生産合理化やノウハウの集積だけでなく、農業を魅力的にする視点も重要で、あらゆる方々が社会参画できるような職業、農山漁村をつくりたい。農業は魅力的な仕事の間であってほしいと思う。働き方改革や人材確保は現在の課題であって、実は、働くということは自己実現であったり社会参画、社会貢献がベースにあり、天候に左右される農業が楽しい、次世代の子供たちに安心・安全なものを食べさせたいなど、思いがあって施策が入ってくるような視野を持たなければならない。

3つ目は、グローバル（グローバル+ローカル）、海外と国内・地域との折り合いをどうつけていくか。牛でいうと、ビーフステーキではなく、和食に合う牛肉の輸出をコンセプトにしている。カレーライスやラーメンなどのローカルの持っている文化性を受け止めつつ、京都の文化の良さを世界の方々に理解してもらうような戦略を立てなければならないのではないか。それを我々はグローバルといっている。大学や日本語学校に通っている方々も含めて現実に1万人の留学生等がいる社会の中で日本の食文化と海外の融合もあるだろう。タイの小学校と日本の小学校をインターネットでつないで交換授業をした時に、言葉が通じないから弁当の見せあいっこをしようとした。タイには弁当箱という考え方がなかった。逆にタイは3食外食という食文化があった。海外の食文化を尊重しながら日本の食文化を紹介して楽しんでもらえないか提案ができればというようなことを考えていかなければならない。単に輸出をして金儲けをしようというのではなく、輸出はお互いの食文化を尊重しつつ、食により健康や家族のコミュニティを維持するなど考えるべき。林業などでは50年100年単位の仕事であり、水産業もみんなを守らなければならない。そういうことも含めた上でのビジョンがよく考えられたものになればいいと思う。

●農林水産ビジョンの構成について

将来ビジョンをいかに明確にできるかが重要。それができれば「重点戦略」にもつながると思う。将来ビジョンがしっかり見えて、農林水産業に携わる方々と共有できるようなものにしたい。

本ビジョンは行政側のビジョンでもあるが、府民のためのビジョンでもある。府民理解と参画が必要。ビジネス創出には、ソーシャルビジネスも含んでおり地域をどうしていくかという意味合いもある。企業も府民も子供たちも共同してやっていこうとなっていた大きくとありがたい。京都府の新総合計画も同じような思いで検討している。例えば、子育て環境では、「ベビーカーを連れたお母さんが電車に乗ってきたら、嫌な顔をする社会がいい社会ですか。」といった議論までしている。

ビジョンでも、例えば「魅力ある持続可能な農山漁村の姿を輸出する。」など、福祉などを含めた幸せがつまった農山漁村の姿を、今後世界に広げていくなど。輸出についても、売上目標や数値目標を京都らしくするためには、少し下げた売上目標が良いのでは。それは、地産地消などで支出が抑えられるような農山漁村の姿が必要。おすそ分けの文化など、収入が少なくても豊かに暮らしていける姿を輸出することは京都らしい。

重点戦略はターゲットごとに分類してはどうか。また、府民憲章のように農林水産部として府民はこういう考え方で行動しますよと標語になれば分かりやすい。

ビジョンをPRするチームがいるのではないか。巻き込む場を用意する必要もある。

インパクトのあるキーワード、キャッチフレーズが重要。今度は内容、見せ方も考えないといけない。最近では報告書もコンパクトで絵を入れるなど、最後はデザイナーを入れて作ってもらう。字だけでは読んでもらえない。そうすることで、PR用のチラシができてくるような方法で報告書を作っている。また、農林水産省のホームページも動画で説明しているように、最近では動画も増えている。

現場に対するメッセージをいかに分かりやすくするかが私の仕事だと思っている。たくさんの方に見ていただけるビジョンにしていきたい。

学生が京都府に行って漁業をやろうと思った時に、ビジョンを見て、これなら京都府でぜひやろうと、京都府のどこに聞けばサポートを受けられるかなど具体的なイメージが湧くようなビジョンになるよう、精一杯お手伝いしたい。

府民などの参画のきっかけとなるトリガーが必要。これから働こうとする方のトリガーになるようなものになると、参画型ビジョンになるのではないかと思う。

総合計画も抜本的に見直しているところ。ビジョンに見直しを求めるところではないが、もう少しフリーディスカッションをして、ワードを洗い出して盛り込んだり、委員の方々から宣言のためのキーワードを御提案いただくなどしてほしい。

やる気スイッチを入れるような参画型のビジョンであり、その魅せ方が大切。

●閉会あいさつ

思いを御理解いただき、今後も御協力いただきたい。農林水産業は生活の根底の部分を支えているものだと思っている。世界遺産の取組の時に海外で「いただきます」は命を頂くこと。「ごちそうさま」は自分の口に入るまでに多くの方が御苦労していることに対し

での感謝であると説明してきた。日本人の食事に対する考え方をみてもやはり農林水産業がベース。多くの人が一肌脱ぎたくなるようなビジョンにしたい。